

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## Women tied with solitude : a reading of The House in Paris

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丹治, 美那子, Tanji, Minako メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1788">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1788</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 絆としての孤独 *The House in Paris* を読む

丹 治 美那子

### 1. はじめに

*The House in Paris* (1935) は、小説の構造という点において Elizabeth Bowen の作品の中できわめて実験的であると言える。フランスとイギリスにまたがり繰り広げられる悲恋の顛末とその余波を物語の中心に据え、恋愛の進行が描かれる「過去」と名付けられた第2部を、それから10年後のとある1日が描かれる「現在」と題した第1部と第3部が挟み込む形をとっている。別段大きな事件が起きることのない「現在」に悲劇に満ちた「過去」が挿入されることで独特の奥行きが生まれており、多くの批評家が構造の観点から本作品を論じている。<sup>1</sup>

本稿では小説の構造を踏まえつつも、Bowen が他の作品においても一貫して描いている孤独というテーマにより重点を置いて論じたい。というのも本作品の中心を成す悲劇的な恋愛の原動力となっているのは、絆とさえ呼びうるほどの孤独による分ちがたい結びつきだからである。ただ、この結びつきは恋人同士のものではない。悲恋を取り巻く女たちの結びつきである。恋が突如として生まれ育まれた末に悲劇へと追いやられる陰には、一見無関係であるかに見える女たちの存在と奇妙な絆が見え隠れする。ある意味で前面に押し出されている恋人同士のつながりよりも、事件の水面下でうごめく女たちの結びつきのほうが深遠な趣を帯びているように思えてならない。ここでは女たちを強く結びつけ合うものをいやしがたい孤独感であるとみなし、彼女たちの絆が悲劇の恋にどう影響を及ぼしているかを考えることで本作品を読み解きたい。

### 2. 空間を超える孤独の絆

本作品の中心を成す悲恋に関わる女たちは三人である。婚約中の身でありながらフランス系ユダヤ人の Max と恋に落ちるイギリス人の Karen、Max の婚約者であり Karen の友人でもあるフランス人の Naomi、Naomi の母親である

1 Eluned Summers-Bremner は中身が空の手紙が登場することをふまえて作品全体を手紙にたとえ、第2部「過去」を便箋、第1部と第3部「現在」を封筒として、「過去」の内容が「現在」へのメッセージであるように論じている。Andrew Bennett と Nicholas Royle は第2部「過去」を「現在」において突如痛みと共に思い起こされる記憶であるとし、作中にしばしば見受けられる傷のイメージと重ねて 'wound'、'scar' と解釈している。

Fisher 夫人である。Karen と Max の互いの婚約中に始まった恋は、純粋に二人の意志によるものに見えつつも、実は Karen と Fisher 夫人の不思議な結びつき、Naomi と Fisher 夫人の親子の結びつきと密接に関わっていると言える。

最初に、Karen と Fisher 夫人の結びつきに焦点を当てたい。Karen と Fisher 夫人は、登場人物の記憶や思考の中を除くと、全編を通して同じ空間にいる状況は一切描かれない。にもかかわらず、二人は不思議と互いに意識し合っている。特に Karen が Fisher 夫人に対して抱く反感は容易に読み取れる。Karen の視点で語られる「過去」において、Karen がその数年前に Fisher 夫人が営むパリにある下宿屋で暮らしていた頃を思い出す場面は、夫人に対する否定的な見解で溢れている。まず、夫人の底知れなさは他に類を見ない程であり、Karen に漠然とした恐れを抱かせる。Fisher 夫人は人の心を巧みに操り支配することに長けている上に、その能力を発揮する様子はとても人間業とは思えない。Fisher 夫人は、パリに留学に来た若い娘たちを何人も自らの家に住まわせてきたが、彼女たちとの接し方から夫人の魔力にも似た力がうかがえる。

She [Mme Fisher] put up with your presence amiably. She asked no questions, but knew: she knew where you went, why, with whom and whether it happened twice. Though Paris was large, you were never out of her ken. The girls, discussing this, hovered between an idea of the supernatural and Naomi's having been told off to shadow them. [...] — but how could Naomi shadow two girls at once? There must be more to Mme Fisher than that: her marked unobservingness and withheld comment gave her terrific power over the girl's ideas. (102-103)

Fisher 夫人は監視をしている様に見えないにもかかわらず、どういうわけか下宿人の行動を逐一把握している。‘She was somewhere all the time.’ (103) と Fisher 家に入出入りする人間に思わせ、彼らを圧倒的な力でもって支配する。ただ夫人の態度そのものは常に穏やかである。それでも夫人が ‘that unspeaking smile’ (102) と呼ばれる独特の有無を言わさぬ微笑みを顔に浮かべるだけで、周囲の人間は夫人の意図に沿った行動をとらざるを得なくなるのである。支配に抵抗を示す者がいようものなら、限りなく穏やかに、しかし容赦なく排除する。あたかも、家の支配を維持するためならば手段を選ばないといった態度をとる。そんな彼女を Karen は ‘a witch’ (155) と形容しさえする。

加えて、Karen は Fisher 夫人とその友人 Max の関係性にも反感を持っていた。Max は Fisher 家に夫人の友人として長年頻繁に入出入りしているが、夫人

は息子程も年の離れた Max に恋心を抱き、狂気じみた情熱でもって彼をがんじがらめにする。夫人の思慕は一方的なものではあったが、Max は夫人との関係について ‘ “[...] In my [Max] youth, she [Mme Fisher] made me shoot up like a plant in enclosed air. She was completely agreeable. Our ages were complementary. I had never had the excitement of intimacy. [...] ]’ (139) と言っている。家族も財産も持たない Max はフランス社会において生きづらさを強いられるがゆえに、Fisher 家での夫人との物理的にも精神的にも「外界から閉ざされた」密な交流によって、「成長させられる」と共に安らぎを感じていたにちがいない。夫人と Max はそれぞれが相手に抱く感情は微妙に異なっているものの、精神的に支えあっていたと言える。Fisher 家に下宿していた当時、Karen は二人の親交、とりわけ夫人の Max に対する激しい愛情を日々目の当たりにしてきた。当時 Karen 自身は Fisher 夫人の一人娘である友人の Naomi が Max に恋していることを知りながら、彼女をのけ者にすることで彼と親しく付き合う Fisher 夫人に怒りを覚えていたと思っていたが、後に本当は自分が Max に好意を持っていたため夫人に嫉妬していたのだと考え直している。この様に、Karen は Fisher 夫人に常に対立姿勢を取っていたと言える。

けれども、Karen が Fisher 夫人に対して抱いていた対立感情や反感には、より複雑な意味が含まれているように思われる。Maud Ellman は Karen と Fisher 夫人の関係について、次のような興味深い指摘をしている。

The most important of these female bonds, although also the most understated, is the mimetic rivalry uniting Karen to Madame Fisher. Although they never meet in the same room, theirs is the strongest undercurrent of desire in the novel, theirs the transport which everyone is sacrificed. Naomi is jilted, Ray betrayed, Leopold abandoned, Max driven to suicide in order to sustain the bond of opposition between Karen and Madame Fisher — ‘that opposition that is love.’<sup>3</sup>

確かに、Karen と Fisher 夫人の関係には、対立ともある種の愛ともつかない奇妙さがある。殊に Karen の Fisher 夫人への対立や反感は愛の裏返しであると言えるだろう。では、Karen は一体 Fisher 夫人のこういった要素に強い関心を抱

2 作中で Max が ‘In France to have no family can be more humbling than poverty.’ (163) と語っていることから、フランス社会において家族がいないことは特に生きづらさにつながり得ることがうかがえる。

3 Ellmann, Maud. *Elizabeth Bowen: The Shadow Across the Page*. (Edinburgh: Edinburgh University Press, 2003), 125

くのか。それは、Karen の置かれた境遇に対する考え方に表れている。

Karen が生まれたのはイギリスの裕福な家庭で、彼女は何不自由のない恵まれた環境で育った。Karen の育った Michaelis 家は次のように描かれる。

The Michaelis lived like a family in a pre-war novel in one of the tall, cream houses in Chester Terrace, Regent's Park. Their relatives and old friends, as nice as they were themselves, were rooted in the same soil. Her parents saw little reason to renew their ideas, which had lately been ahead of their time and were still not out of date. Karen had grown up in a world of grace and intelligence, [...]. [...] they offered nothing to satire [...]. [...] The Michaelis were in the least unkind sense, a charming family. (70-71)

Karen が身を置くのは非の打ちどころのない、居心地のいい環境であるように思える。また、時代の流れにあまり影響を受けず、ほとんど変化することのない環境であることも分かる。Michaelis 家の人々は、あらゆる意味で変化を忌避する。自分たちの生活や価値観はもとより、感情までが大きく揺らぐことを嫌う。そのため彼らは事を荒立てないことばかりに気を配り、Karen はそれに疑問を感じる。Karen は、家庭にある程度居心地のよさを感じてはいる一方で反発も覚える。そして Karen の反発は、とりわけ Michaelis 家の中核的存在である母親の Michaelis 夫人 (Mrs Michaelis) に向けられる。Michaelis 夫人は、Michaelis 家とその階級の典型的な考え方と傾向を体現したかの様な人物である。彼女は自らの価値観に絶対的な自信を持ち、それを通して世界を見ることしかできないし、また望んでいない。自分の価値基準から外れるものを得体の知れないものとして遠ざけ見ないようにすることで、Michaelis 家の平穏と安定を守ることができると信じて疑わない。Michaelis 夫人は、世界を表面的にとらえようとする。そうすることで、物事を明確に理解できると考えるからである。彼女は明快でないことを極端に嫌う。特に彼女は芸術をその明快でない性質のために嫌悪する。芸術は、物事の表面の向こうにあるものを、作り手の主観によって把握しようとする試みである。当然、芸術作品には作り手の諸々の感情が宿る。作品を見る側は、作品を通して作り手の感情に触れることになるのだが、それを的確につかむことはおそらくできない。感情は明快でないものの最たる例である。Michaelis 夫人は“anti-romanticism” (109) と形容される様に、どのような場合であれ感情に走ることに、感情に溺れることに耐えられない。必要以上に感情的なものは、Michaelis 家の穏やかで、気品に満ちた日常を脅かしかねないと、彼女は懸念する。彼女は、家庭や日常に変化が生じるこ

とは、家族にとっては災いであると共に、自分にとっては居場所の崩壊である  
とさえ考えているからである。Michaelis 夫人は、芸術をはじめ、感情的な  
ものを受け入れられない態度をあからさまに示し、時には抑え込もうとする。  
Karen はそんな母親をはじめ所属階級の人々に対し ‘They keep me away from  
everything has power’ (161) と不満を抱く。また、母親と所属階級に反発する  
かのように絵を習うが ‘Her pencil lacked something, not quickness or energy,  
simply power, perhaps.’ (73) とあるように彼女の絵、ひいては彼女自身に  
‘power’ が欠けているということを Karen は認識していると同時にそれを求め  
ていると言えるだろう。そしてこの ‘power’ という言葉は Karen と Fisher 夫人  
のつながりを考える上で重要である。Fisher 夫人は ‘it was her power she loved’  
(183) と言われるように ‘power’ を持つ人物である。Karen は Fisher 夫人の  
‘power’ に惹かれていると言える。

だが果たして ‘power’ とは何なのか。これは Karen の婚約から Max との恋  
に至るまでの過程から読み取れる。Karen は婚約してからというもの、自らが  
属する家庭と階級からの逃避願望を急速に募らせる。それは同時に ‘power’ を  
追求することでもある。Karen が婚約した Ray は、同じ階級内の人物であり、  
彼女の家族と同様の考え方や性質を持っているということもあり、彼らの結婚  
は “that touch of inbreeding” (71) と表現される。Karen は婚約することで、あ  
る程度の居心地の良さを感じていた自分の階級に腰を据えることに安心感を覚  
える一方で、漠然とした不安も抱える。Ray と結婚することは、自分がこれまで  
反発し時折逃亡さえ夢見てきた階級に根を張ることにちががなく、今度こそ  
本当に逃げるのが叶わなくなると Karen はどこかで常に考えるようになる。  
そして、その不安は、婚約中 Ray が仕事で海外に赴任している間一人だけイ  
ギリスに残り、周囲からの婚約の祝福に対応する日々を送っているうちに、次  
第に膨らんでいく。この状況から逃れるように、Karen はアイルランドに住む  
母親の妹であるおばの Violet を訪ねる。Karen のこの行動は、Violet が Michae-  
lis 家の親戚の中で、唯一彼らの階級独特の生活をしておらずどこか浮き上がった  
存在であるためである。しかしそれ以上に Violet が ‘she had always done as  
she wished’ (76) と描写されるように望むがまま生きてきたように見えたため  
である。それは Violet が病に侵され余命わずかであることをおじに知らされた  
後に Violet 自身の口から自らの人生に今もなお後悔が残っているのだという感  
慨を聞いた時 Karen が大きな衝撃を受け、思わず ‘some gaunt, contemptuous  
person who twisted life his own way…’ (79) を求めて Fisher 夫人に手紙を出す  
ことから分かる。Karen は所属する階級に身を置くことに少なからず抵抗が  
あり、Ray と結婚して母親と同様の生活を送ることにしり込みしている。その

ため自分の感情に従って行動する人間に接近したかったのである。だからこそ、Violet への思いがはぐらかされた時の失望は大きく、思わず Karen は Fisher 夫人の謎めいた ‘power’ にあらためて思いを馳せざるを得なかったのであろう。Fisher 夫人はパリの下宿屋で周囲の人間を思い通りに操りながら暮らしている。家族や同じ階級の人々が緻密に作り上げた居心地のよいはずの環境に不自由さや窮屈さを感じずにいられない Karen はそんな夫人に恐れを抱きつつも魅了されるのだ。

Fisher 夫人のほうでも Karen を特別視していることがうかがえる。どういうわけか Karen は下宿時代に ‘Karen [...] crossed Mme Fisher without being packed home’ (103) と言われるように、余計なことをすれば即刻追い出されるはずの Fisher 家で例外の待遇を受けていたのだ。このように Karen と Fisher 夫人は互いに少なからず関心を持っていると言える。

ただし Karen と Fisher 夫人の結びつきは Karen と Max の恋愛を通してより強くなると言える。Fisher 夫人が二人の恋愛に関与しているらしいことは様々な形でほのめかされる。Max を通して Karen に伝えられる Fisher 夫人の小さな行動や Karen の家宛ての一見当たり障りのない Fisher 夫人の手紙などの物理的なものから、二人の逢瀬の際に感じられる ‘Mme Fisher seemed to have come in’ (140) といった精神的なものまで、二人の恋には生身の姿は見せないながらも始終 Fisher 夫人の面影がつきまとう。そして気味の悪いことに二人とも Fisher 夫人に操られていることを半分悟りながらもフランスとイギリスを行き来しつつ逢瀬を重ねるのである。この恋は Karen にとっては身を置く階級への不安と反発から、Max にとっては Fisher 家での居心地の悪さからの逃走のように見える。けれども同時に Karen にとっては Fisher 夫人への接近であるとも言える。Karen が Max と恋に落ちることは自らの属する階級への反発が具体的な形をとって現れたものである。これこそ、Karen が Fisher 夫人の中に見出し引きつけられた「自らの望みに従って生きる」ことである。Max との恋愛に走ることで Karen は Fisher 夫人と同じ ‘power’ を手にすることができたかに見える。

しかし、Karen は Max との恋愛によって打撃を受けることも確かである。Karen と結婚するため Fisher 家に Naomi との婚約を解消しに向かった Max は Fisher 夫人がかけた言葉に耐えきれず自殺する。にもかかわらず Karen は Max の子どもを身ごもる。娘の婚約中の不実な行為を知った Michaelis 夫人はショックが元で病死する。当初の予定通り Ray と結婚するものの、過去の悲恋とそれによって犠牲になったものを考え続け心が休まることはない。Karen は一人で苦しみを抱え孤独な状況に陥るのである。実はこの状況も Fisher 夫人と同様

である。「人を思い通りに操る女」という周囲の人の与えたレッテルは、更に一層深い孤独へ夫人を追い込むことになる。そんな夫人の姿勢をなぞるかのよう望むがまま行動した Karen が孤独を抱え込むのは避けられないことだったのである。Fisher 夫人が持つような ‘power’ を求めることは、同時に孤独と向き合うことでもあるのだ。

Fisher 夫人もこのことを認識しているようである。悲恋から 10 年後の「現在」で Karen は Fisher 家で生まれて以来離れて暮らす Leopold に会う予定だったが結局会うことができない。それを受けて Fisher 夫人は Leopold に Karen について ‘Courage as much as passion made her your mother.’ (207) と Karen の過去の行動に対して肯定的な発言をしつつも ‘She always had courage, but could not always command what courage she had.’ (200) と彼女の弱さにもふれて語っている。これら二つの文で共通して用いられる ‘courage’ という言葉はそれぞれ微妙に違った意味であるように思える。一つ目の文の ‘courage’ は Max との恋愛に走ったことを意味することから、望みのままに行動する勇気なのだろう。対して二つ目の文の ‘courage’ に関しては、Karen が発揮できなかった勇気について言っている。Karen が勇気をもって向き合うことができないのは息子 Leopold である。Karen は Leopold から二度逃げる。出産後はすぐに里子に出し、その 10 年後の Fisher 家での面会にも行けない。Harriet Blodgett が Leopold について ‘a personal, negative symbol which has accreted all the emotional energies she once expended’<sup>4</sup> と指摘するように、Leopold は Karen にとって過去の悲恋が形をとって現れたかのような存在であり、彼女が抱える孤独の源でもある。よって二つ目の文の ‘courage’ は望むまま行動することによって否応なく抱え込む孤独を受け入れる勇気ではないだろうか。二つ目の文で Fisher 夫人は Karen が背負うべき孤独を受けとめていないと言っているのではないか。ただいずれにせよ、Fisher 夫人がここで Karen の成した、そして成すべき行動を ‘courage’ という肯定的な言葉で表現しているのは興味深い。夫人は望むまま行動することも、そのために孤独になることをも肯定的にとらえているのだ。だから Karen が Leopold に会いに来ることができないことはおそらく夫人を満足させただろう。Leopold に向き合うことを苦痛に感じるのは Karen が 10 年前の悲恋に未だにとらわれ孤独であることを示す。孤独を受け入れずとも孤独な状態に身を置かざるを得ない Karen に Fisher 夫人は共感を抱くのだろう。Karen と Fisher 夫人は自らの感情に従った行動をとることで強いられる孤独によってつながると言える。

4 Blodgett, Harriet. “The Necessaty Child: *The House in Paris*” Ed. Harold Bloom. *Elizabeth Bowen*. New York: Chelsea House, 1987.



ここまで見てきたように、Karen と Fisher 夫人は空間的には離れた所にいながらも精神的には密接に結びついている。望みのままに生きることによる孤独の絆でつながっているとと言える。

### 3. 親子の歪な孤独の絆

次に、Naomi と Fisher 夫人の結びつきについて考えたい。二人は親子であると共に恋敵同士でもある。Fisher 夫人は Max に友人に与える以上の情熱的な愛情を注ぐ。Naomi は長年 Max に片思いをした末に念願かなって彼と婚約する。二人とも Max を深く愛していたはずである。だからこそ、Max が Karen との恋愛に走り自殺した後の Fisher 親子の様子は衝撃的である。Max が自殺するため手首を切ったのを目の当たりにした直後の Fisher 夫人は ‘all her life her power had never properly used itself, and that now it had used itself she was like the dead, like someone killed in victory.’ (183) と描写される。この時の夫人からはほぼ確実に訪れるであろう愛する人の死を悲しむ様子は微塵も感じられない。それどころか、疲弊はしているものの ‘like someone killed in victory’ とあるように持てるものを消耗し尽くした者だけが味わう異様な達成感に満ち溢れているようである。同様に Naomi の婚約者の裏切りと死への反応も不可思議である。Naomi は Karen と Max が恋に落ちることで自分を裏切ったことを一切とがめることをしない。その上、Max の死後再会した Karen に ‘pity’ (179) さえ示しながら、‘you, Karen, must have done as you wished’ (181) と理解を示すかのような言葉までかける。Max の自殺についてもきわめて穏やかに淡々と語る。確かに Naomi は他人を思いのままに操ることに長けた母親とは正反対であり、控えめで自己主張を滅多にしない。Naomi の控えめな態度は度を越しており、そのため時には痛々しさや滑稽さすらも感じられる。Hermione Lee が ‘Awkward, self-punishing, she is the natural victim’<sup>5</sup> と言うように、Naomi は正に他の登場人物の行動による「犠牲者」のようである。母親から理不尽な扱いを受けることもしばしばであり、「現在」では家にやって来た子どもたちにさえ邪険にされる。これほどまでに幾度となく不当に傷つけられるのにもかかわらず、Naomi はいかなる反論も抵抗もしないばかりか表面上は全てを甘んじて受け入れているように見える。ただ、いくら控えめといえども限度がある。ましてや婚約者と友人の裏切りと婚約者の自殺という悲惨な事件が立て続けに身に降りかかりながらも平静さを保ち続ける Naomi は、やはり不自然に過ぎる。Fisher 夫人にしても Naomi にしてもとても愛する人間の裏切りや死に直面した者とは思えないほど奇妙に落ち着きはらった反応を見せているのである。

5 Lee, Hermione. *Elizabeth Bowen*, revised edition. (London: Vintage, 1999), 99

あたかも Fisher 親子は Max に関わる一連の出来事を最初から予測していた、あるいは望んでいたかのようなのだ。事実、Fisher 親子が Max を Karen との恋に向かわせようとしているかに見える様子がかがえる場面がある。以下の引用では、Naomi の希望により実現した Karen と Max の数年ぶりの再会以後、Fisher 家の雰囲気が変わったことについて Max が語っている。

“ [...] Since we [Max and Naomi] returned from London, she [Naomi] has never stopped watching me [Max] : I have never felt her eyes leave my face. Imagine the statue's face on your own level, spoilt with anxiousness, following where you go. Her eyes snatch at me and she cannot do things calmly. I felt her refuse to be fully happy till you [Karen] and I met again: [...] Her mother [Mme Fisher] watches her watching, and misses nothing. [...] ” (163)

ここから、Max の一挙一動を追いかけるように見守る Naomi を Fisher 夫人が逐一観察しており、更に二人がそれぞれの対象に投げかける視線に気づいた Max が二人を注視しているという異様な光景が浮かび上がる。確かにこの無言の圧力をかけるかのごとき Naomi の視線には Max が言う通り、彼を Karen との恋に向かわせたいという Naomi の願いが込められていたとしても不思議はない。現にこの時の Naomi の目は、ちょうど彼女が数年ぶりに Karen に Max と会うよう根気強く説得していた際の目を彷彿とさせる。その場面で Karen は説得されている間、‘Her [Naomi] eyes start out of her head.’ (99) と感情的になった Naomi についていつか Karen の母親が言っていたことを思い出しつつ Naomi を眺めるのである。激しい感情を帯びた Naomi の目に焦点が当てられる描写は、この二つの場面にしか登場しない。Naomi は Max に会うよう Karen を説得したように、Karen に再び会うよう Max に目で訴えているようである。そしてこの場面での Fisher 夫人の存在も注目すべきである。この頃の Fisher 夫人の様子に関しては Max が ‘When she [Mme Fisher] did speak, she spoke of you [Karen].’ (139) や ‘She [Mme Fisher] told you [Karen] loved me [Max].’ (140) と語っている。Fisher 夫人もこの頃 Max と Karen の恋心をかき立てるかに見える行動ばかりをとっているようで、そう考えると夫人の意味深長な凝視もそういった行動のひとつであると考えられる。したがってこの場面では、一言も口には出さないまま、それでも親子二人で一緒になって Max を Karen へと向かわせようとしているととることができる。実際、Max はこの視線の交錯による張りつめた空気に耐えられなくなったがために Karen に会わざるを得なくなったと語る。あたかも Fisher 親子は Max を追い出すために共謀

しているようにも思える。

そもそも、Fisher 親子は不可解だが固い絆で結ばれている。二人は表面上仲の良い親子とは言い難い。支配的な母親と抑圧された娘の典型であるかのごとき親子関係を築いている。Fisher 親子の関係が詳しく描かれている「現在」では、Naomi は病床にある Fisher 夫人に振り回されている。母親に引き合わせるために招いた Karen の息子 Leopold と、知り合いからあずかったイギリス人の少女 Henrietta の二人の子どもたちの相手に追われながらも、Naomi は始終 Fisher 夫人の望む通りに動いているようである。Fisher 夫人の部屋から杖で床を叩く合図があれば即座に飛んでいき、夫人が子どもたちとの面会を要求すれば、穏やかでない事が起こることをどこかで想定していながらも従う。事実、Leopold も Henrietta も夫人と面会することで激しく感情を揺さぶられる状況に直面する。特に Henrietta が Naomi 同席のもと夫人に対面する場面は異様に静かな緊迫感が走り印象的である。Henrietta から見た Fisher 夫人は床に伏した状態でありながら ‘Neither patience nor discontent but a passionate un-resignation was written across her [Mme Fisher] features, [...] Her self looked, wildly smiling, out of her body.’ (47-48) とありひどく衰弱した身体にそぐわない気性の激しさが感じ取れる。そんな Fisher 夫人と Henrietta の会話は幾度か惨事を招きかねない方向へと傾きかけ、その度に無難な話題に留まるように配慮する Naomi によって危うい所で軌道修正させられるが、Leopold の父親である Max について話が及んだ時、ついに Fisher 夫人は ‘He broke Naomi’s heart.’ (52) と言い放つ。この発言がいかに破滅的な威力を持つかが ‘Henrietta felt she had seen Miss Fisher undressed.’ (53) という一文に凝縮されていると言っていいだろう。11 歳の Henrietta には Fisher 夫人の発言の意味するところを正確に理解することはできないとしても、その状況の例えようもない息苦しさは強く感じずにはいられない。そして Naomi はというと ‘the air of having known all along this would come’ (52) を漂わせながらすすべもない。この場面は Fisher 夫人と Naomi の支配被支配の親子関係を端的に表しているのではないか。ここで Fisher 夫人は Naomi を傷つけ Henrietta を脅かすことをむしろさまざまな経験を積んだ年長者としての使命と心得て疑わぬようでもある。それでもこの行動が周囲の人間に危害を及ぼしかねないことは確かだ、Naomi はこのことを分かっているにもかかわらず、母親の命令に逆らうことができない。小さな抵抗を試みることはあっても結局は母親の思い通りに事が運ぶに任せるほかないのである。Naomi は Fisher 夫人に服従し操られる ‘the helpless daughter’ (52) なのだ。

しかしこの一見すると居心地の悪い親子関係が、実は親子の絆を強固にする

という逆説的な状況を生んでいることも事実である。Henrietta は Fisher 親子を ‘mad people’ (45) と形容するが、これはおそらく外部の人間から見たこの親子に関する代表的な評価であると言える。Fisher 家がパリの町の中で微妙に異彩を放っているのは本作品の冒頭でほのめかされる。Fisher 家は ‘The Fisher’s house [...] looked miniature like a doll’s house.’ (22) と描写されているが、これは周りの家よりも小さいという理由からだけではなく家の内情から醸される単純には理解しがたい異質さを表しているともとれるだろう。確かに Fisher 家は近隣の家とは一風変わっていて、家に入出入りするのには親子を除けば下宿している留学生の娘たちか Max である。Fisher 家にやって来る人間は皆フランスにおいてよそ者と見なされる人々である。留学生の娘たちはフランスでは外国人とされるし、Max は家族も十分な財産も持たないこととユダヤ人の混血であることのために社会に居場所を見出せないでいる。フランスの社会においてあらゆる意味で疎外されうる立場にある人々が Fisher 家に集まるのだ。そしてそういった人々と共に生きる Fisher 親子もまた同様の立場にあることがうかがえる。二人には外にあるはずのパリの町との結びつきが全く認められない。近隣住民との関わりは一切なく家の中の狭い人間関係だけが親子にとっての世界であるかのような暮らしをしている。親子はどういうわけか外の世界と関わることができずに非常に孤独な状況に身を置いている。そのような状況下では、母親が娘を絶対的に支配するという外見上は異様な関係が親子双方にとって奇妙な安定感をもたらしているのではないだろうか。だからこの親子は決して離れることがないのではないか。Naomi は Max との婚約中に結婚しても母親の住む家から出て行くことはないかと固く決心していたし、Fisher 夫人のかけた言葉のために Max が自殺に至った後も母親を見捨てることはしなかった。そして Fisher 夫人が娘と Max の婚約に反対したのも、実は Max を奪われることではなく Naomi との親子関係が崩れることを恐れてのことだったのではないだろうか。Naomi は Max によって ‘like furniture or the dark’ (146) と形容されるが、これは彼女の本質を巧みにとらえていると言える。「家具や暗闇」には、薄気味悪さがつきまとう反面、不思議と安心感も漂う。Naomi はその両方の性質を持つ人物である。Naomi は自己主張を極端に控えるばかりか、まるで意志を持たないかのように周囲の状況に対して流されやすく反応に乏しい。人間が持ちうる意志や感情が欠如しているかに見える Naomi が何を考えているのかは全く読み取れない。彼女には常にそういった気味の悪さがついてまわるのだ。その一方で、Naomi がどういうわけか他者に限りない安らぎを与えることも確かである。Max は Naomi と婚約した理由を ‘I could not endure being always conscious of anyone.’ (146) と語ってから上記の様に形容している。「家具

や暗闇」の様に意志や感情を感じられない Naomi は、他人を意識することで苦痛を覚えながらもそれをやめられない Max にとって、神経をかき乱されずに側にいることのできる唯一の存在なのだ。それと同様に Fisher 夫人も Naomi が意志と感情をほとんど示さない娘であるがゆえに、娘を支配する母親でいられるのである。自らの支配力をふるうことに生きがいを見出している夫人は従順な Naomi を思い通りに動かすことで安心感を得ているのだ。Naomi は外部の人々に不可解な人物とみなされることが多々あるのに対し、Fisher 家においては夫人に忠実に従い安心感を与える存在なのである。家の中でのみ重要な役割を果たしているという点においても、Naomi は「家具や暗闇」の様だと言える。

そうすると、Fisher 親子の理解し難い一連の行動の説明がつく。そしてそれは同時に Fisher 家の親子の絆が、外部の人間に対して持つ残酷さ、酷薄さを如実に示すことになるだろう。Fisher 親子が自分たちの結びつきを守るために Max を死に追いやったことになるからである。そもそも Max も Fisher 家の人間関係の中でしか生きていくことのできない人物である。彼は不運な境遇のために社会に安定した居場所を見つけることができない。そのような中、Fisher 家の客人として迎えられ夫人と親しく接するうちに、Fisher 家が彼にとっての居場所になる。夫人に愛された Max は彼女に全てを支配されるようになる。夫人が望む通りの行動しかできなくなり、つき合う女性さえ皆夫人が差し向ける範囲内に限定される。Naomi との婚約も夫人の差し金であるかのようにはほめかされる。Max は Fisher 家とのつながりを深める内に夫人の見越した通りにしか動くことができなくなるのだ。Naomi も Max について ‘He could do nothing that she [Mme Fisher] had not expected; my mother was at the root of him.’ (182) と Max が夫人から逃れられなくなっていることを認識している。そのような状態にある Max に対して Fisher 家を裏切る行動に導けば最悪の結果を招きうることを Fisher 夫人も Naomi も予想できていたはずである。それでも Fisher 親子は Max に働きかけずにいられなかったのだ。Fisher 親子が Max を愛していたのはまちがいない。Max との婚約中に Naomi がある程度幸せを感じていることは読み取れるし、Fisher 夫人が Max の死によるショックが原因で長い病床での生活に陥ることも確かである。おそらく Max は Fisher 家と深い関わりを持ち過ぎたのだろう。夫人と Naomi のそれぞれの Max への愛情が強固なはずの親子のつながりを揺るがす事態を引き起こすまでに強くなり過ぎたのだ。実際 Naomi と Max の婚約に Fisher 夫人は反対する。Fisher 家において支配力をふるう夫人の意向に背くことは家の中で居場所を失うことと同義である。婚約中の Naomi と Max が ‘As lovers, Max and she were a couple

of refuge' (113) とどこにも安息の地がないことが暗示されるように、二人の関係に対する夫人の反感の強さは相当なものであることがうかがえる。仮に Naomi と Max が結婚に至れば、それまで Fisher 親子が築いてきた不可解だが確かな絆の形が変化することは避けられない。親子にとってこの絆の変化は致命的なのだ。孤独な状況下で生きるために固い結びつきを築き上げてきた親子にとって、互いの存在は絶対不可欠なのであり、したがって、親子の絆を崩しかねない Max は Fisher 家から排除される運命にあったのである。

ただし、Fisher 親子は自分たちの絆の崩壊を防ぐ意志のみを持って行動しているわけではない。Fisher 夫人にしても一度は Naomi と Max を婚約へと仕向けており、必ずしも親子の絆ばかりを第一に考えていない様子も見せる。Naomi も Max が自殺に追い込まれる場面がおとずれるまで自分たち親子の結びつきの異様さに気づいていないようである。その際になって初めて Naomi は 'I saw then, that evil dominated our house, and that the girls who were with us should not be here.' (182) と感じる。ここにおける 'evil' は Max を自殺に向かわす言葉を直接かけたであろう Fisher 夫人を表す表現のようにもとれるのだが、Naomi 自身をも指していると思われる。Naomi はそれ以前に Fisher 夫人が家に関わる人間に対して魔力のごとき支配力をふるっていたことは分かっており、支配に抵抗を示す人物を容赦なく排除する夫人を早くから 'evil' と感じて不思議はないはずである。だがここで Naomi はそれまで認識することのなかった 'evil' を突然悟ったかのようなのである。だとすればそれは、一連の悲劇に彼女自身が内側から深々と関わっていたことを知ったからではないか。Max の死によって終わりを告げる事件は Fisher 親子のいびつでありながらも離れがたい結びつきを証明するものだったにちがいない。Fisher 夫人もこのことに全てが終わった後に気づいたと言える。夫人は「現在」において Leopold に 'To find oneself like a young tree inside a tomb is to discover the power to crack the tomb and grow up to any height.' (203) と謎めいた言葉をかけている。この言葉は Leopold に対する励ましであると同時に夫人自身の生き方が色濃く反映されたものである。ここで用いられる 'a tomb' を「深い苦しみ」と解釈すると、この言葉は「深い苦しみを味わった人間は強く生きていける」という意味にとることができるだろう。Fisher 夫人は Max の死によってこの「深い苦しみ」を経験したのだ。夫人にとって溢れるばかりの愛情を注いでいた Max がこの世から消え去ることには、耐えがたい程の苦痛が伴ったにちがいない。それでも夫人は Naomi との親子の結びつきを選ばざるを得なかったのである。苦渋の選択により、夫人は Max を死へと葬らなければならなかったのだろう。しかし大きな苦痛と引き換えに守ったことで夫人はそれまで当然のものとして受

け止めてきた親子関係の重要さを改めて認識するに至るのだ。Fisher 家から Max という親密な関係にあった同居人が消えることで親子は元々孤独な状況に更に輪をかけて孤独になったと言える。それでも Fisher 夫人と Naomi の親子関係はそのために益々離れがたいものになっていくのだ。

以上のように Fisher 親子の絆は非常に強固であるがゆえに破滅的である。母親と娘の間の支配被支配の関係は理不尽かつ不可解であるが、親子にとっては孤独な状況を生きるための大きな支えとなっており、そのために親子の絆を一層強める。Fisher 家に関わる人々は親子の半分無意識による絆の防衛のために容赦なく傷つけられ、時には排除される。そして孤独な親子は益々奥深く確かな安堵をもたらす孤独を呼び寄せるのだ。こうして彼らは外の世界から隔絶された小さな家の中に自分たちだけの独特の世界を築き上げるのである。

#### 4. おわりに

ここまで見てきたように、女たちの結びつきは本作品の中心を成す悲恋を陰で動かしている。そうすると、Fisher 夫人、Karen、Naomi の三人の女たちに愛されたために悲劇に陥ったかに見える Max は、実はそれぞれの女たちの望みや思惑に振り回された上に逃れられず散った被害者と見なすことができる。Karen は Fisher 夫人を ‘a witch’ (155) と呼ぶが、互いに固く結びつきあって Max を死に至らしめる点において、Fisher 夫人だけでなく Karen と Naomi も「魔女」であるかのようだ。

ただ、女たちはそれぞれが結びつくことによって望みや思惑通りに動きつつも、結果的には必ず何らかの犠牲を払った上に孤独な状況に陥っていることには注目すべきである。Karen は Max との恋を通して Fisher 夫人の様な望むまま行動する力を求めたものの、そのことが所属する階級に身を置く上での様々な障害をもたらしたために、たった一人で苦しみや孤独を抱え込むことになる。Fisher 夫人と Naomi も自分たち親子のつながりを死守するために行動することによって、必然的に特別な存在であったはずの Max を死へと追い立てざるを得ないという悲惨な結果を招いた。そのために Fisher 親子は一層孤独な状態を呼び込む。Karen と Fisher 夫人も、Fisher 夫人と Naomi もそれぞれ結びつくことで更なる孤独に直面するという逆説的な状況が生まれているのだ。

女たちが結びつくことで抱えることになる孤独の中核にあるのは、やはり Fisher 夫人である。夫人は Karen と Naomi に働きかけ孤独な状況へと導くのだ。夫人は二人の若い娘を孤独へと引き込む恐ろしい人物であるようにもとれる。しかし、夫人が愛する Max を犠牲にしてまで Naomi との孤独なつながりを手放さなかったことから、夫人自身は孤独に対して肯定的な考え方を持っ

いると言える。夫人は孤独な状況にあることで手にする強さがあると信じているのだ。だから「深い苦しみを味わった人間は強く生きていける」と語るのだろう。夫人が Karen と Naomi を孤独へと向かわせたのは、孤独を通して人生を見つめ直すように促すためだったのではないか。Karen も Naomi も婚約中、夫人のわずかな差し金だけでそれぞれ横道にそれる行動をとったことから、少なからずそれぞれの状況に迷いを抱えていたことは確かである。そんな二人の思いをくみ取った夫人はさりげなく孤独な状況へと続く道を用意したのではないか。Karen と Naomi は一連の事件の後の孤独感によって多かれ少なかれ苦しむが、そのためにおそらく人生を見つめ直しているということはいかたがえる。二人ともそれぞれ大きな決断を下すのだ。Karen は Ray と結婚しつつも Max の子どもである Leopold を引き取る決心をするし、Naomi は母親の元を離れないことを心に決める。そう考えると、周囲の人間を操る「魔女」であるかに見える Fisher 夫人だが、二人の若い娘に対してしたたかな生き方を諭す年長者であることが読み取れる。

以上の通り三人の女たちは孤独を共有することで強固に結びついている。彼女たちの結びつきは、周囲に危害を加える恐ろしい面、互いを傷つけあう面、不思議な安心感を与え合う面と多くの性質を持っており、あらゆる出来事の原動力にもなっている。けれども三人の女たちは「現在」においても「過去」においても物理的にも精神的にも一定の距離を保っている。三人とも互いから離れているようでいながら密接につながっているのだ。

離れていながらも固く結びつき合っているということは、本作品の構造に関しても当てはまる。第1部と第3部で描かれる「現在」と第2部で描かれる「過去」は切り離されて語られ、全く別の物語が差し挟まれている印象さえ受ける。にもかかわらず「現在」には10年前の「過去」の悲恋と結びつく状況や人間関係、描写に満ちている。「現在」で登場人物が何気なく発する言葉や行動が「過去」の出来事を想起させることも少なくない。形式上「現在」と「過去」は完全に切り離されているのだが、互いの関わりは非常に深いことがほのめかされている。そうすると、作品の構造自体が、様々な意味で切り離されている作品の中の人物や要素を結び合わせることを促すかのようにできていると言える。

## 参考文献

Bowen, Elizabeth. *The House in Paris*. London: Vintage Classics, 1998

Bennett, Andrew, and Nicholas Royle. *Elizabeth Bowen and the Dissolution of the Novel*. Basingstoke: Macmillan, 1995.



- Blodgett, Harriet. "The Necessary Child: *The House in Paris*" Ed. Harold Bloom. *Elizabeth Bowen*. New York: Chelsea House, 1987.
- Bremner, Eluned Summers. "Dead letters and living things: historical ethics in *The House in Paris and the Death of the Heart*" Ed. Susan Osborn. *Elizabeth Bowen: New Critical Perspectives*. Cork: Cork University Press, 2009.
- Corcoran, Neil. *Elizabeth Bowen: The Enforced Return*. Oxford: Oxford University Press, 2004.
- Ellmann, Maud. *Elizabeth Bowen: The Shadow Across the Page*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2003.
- Lee, Hermione. *Elizabeth Bowen*, revised edition. London: Vintage, 1999.